



つる雲

文・花園大学

絵・前田昇宏

うろこ雲

花岡大学

島へおよめにいったきり、一度もかえつ

てきたことのないユキねえちゃんが、きよ

うのひるの船便で、かえってくるという手

紙がきていた。

もう、とつくに、かえっているにちがい



だが、あぜ道を走りながらも鶴次郎は、
いつものようにたんぽぽの葉っぱをつかん
でかえってやることを、わすれなかった。
うちでは、だいじにかつているアングラ
うさぎが、おまちなねなのだ。

うさぎは、鶴次郎の毎日のおみやげをよ
く知っていて、足音をきくと網戸に手をか
けて立ちあがり、しんじゆのような目をう

れしそうに光らせる。

とてもかわいい。

だから、早くねえちゃんにあいたくて、

いくらあわてていても、おみやげをもたず

にかえって、うさぎをすっかりさせたくな

い。



鶴次郎は、たんぽぽの葉っぱが目につくと、あわててそれをつみとり、おくれたぶんだけよけいに、びゅッとかけだす。

しかし家のちかくの垣根のところまでかえったとき、鶴次郎はぎくつとして、そこに棒立ちになってしまった。

井戸ばたのぎくろの木の子に、毛皮だけになったアングラウさが夕日をうけて、

べしよりとつるされていたからである。

井戸のコンクリートの上に、てんてんと

血のあとがのこっている。いや、もうそ

の肉をにていたらしく、家の中からすきや

きのおいが、ほのかにただよってくる。

殺したのは、父にちがいない。

おそらく胸の病気だというねえちゃんに

食べさせるためにしたことだろうが、しか

し鶴次郎があんなに大事にしていることを知っていながら、一言のことわりもなく殺してしまふなんて、あんまりひどすぎる。

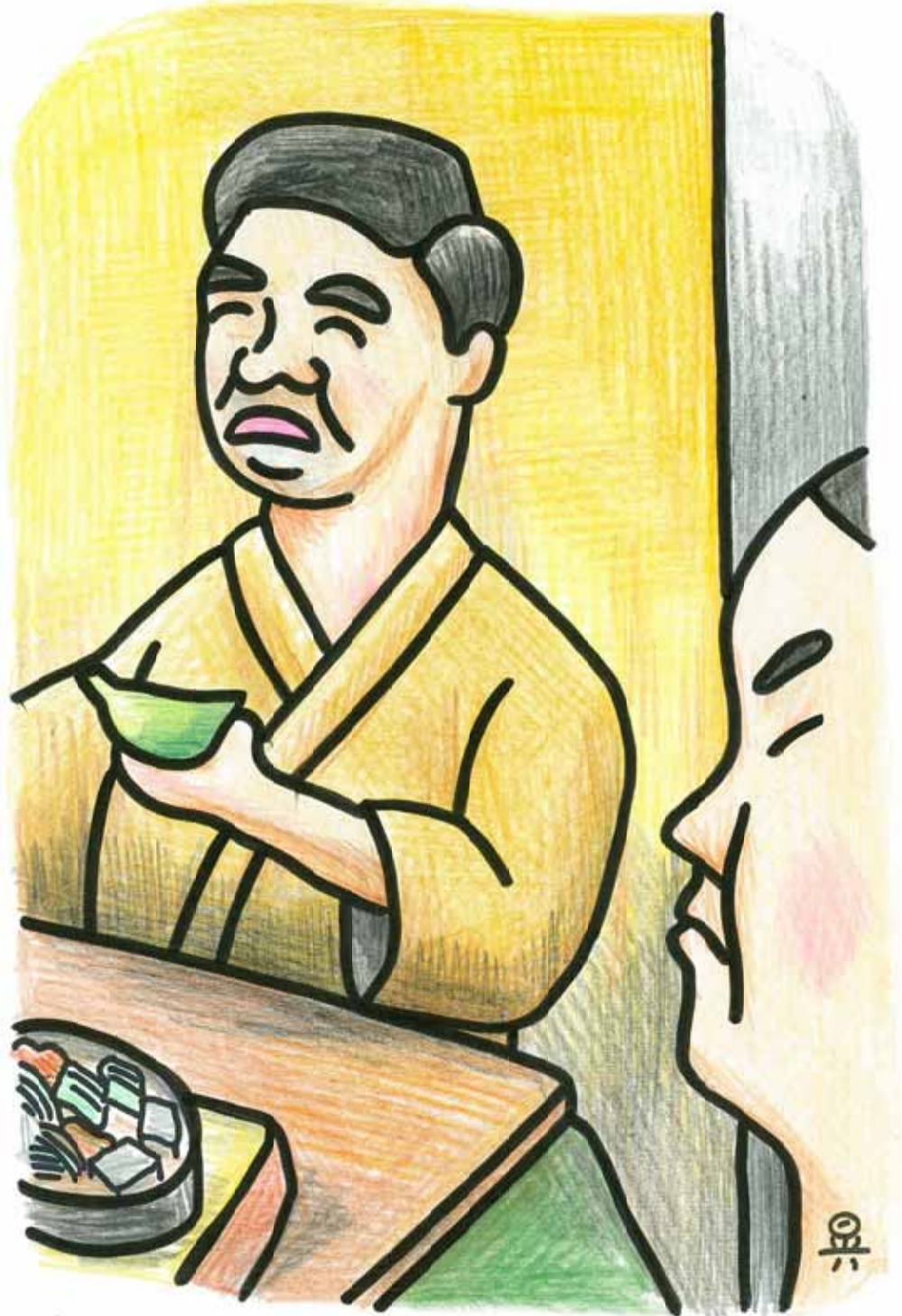
あんまりむごいしうちだ。

たちまちまっ青になった鶴次郎は、こみ

あげてくる激しい怒りに、わなわなふるえ

るくちびるをかみしめながら、くぐり戸の

わきから、座敷の中をキュとした目でのぞ



©

まるで幽霊みたいに、骨と皮にやせているのだ。

げっそりとそげたほおに、髪の毛のみだれかかっている青ざめた顔など、いたいたしくみているられない。

鶴次郎は、そつと目をふせた。

（姉ちゃんは今、もうあんまり長くよう生きていないかもしれない）するとなみだが

、はらはらとこぼれおちた。

鶴次郎は、なみだをぬぐいながら、足音をしのばせて、あとずさりをはじめた。

それからとぼとぼと海べの方へ歩いていった。





父に對する怒りが、いつのまにかすつかり消えていった。いや、あんなにやせおとろえたねえちゃん顔をみたとき、とっさに、鶴次郎のだいにしているうさぎを殺して食べさせる気になった父のあわてた心が、はつきりわかりさえするのだった。うさぎの肉を食べて、ねえちゃんがすこしでも元気になつてくれるんだつたら、鶴次郎

だつて、うさぎをおしいと思わないにちが
いない。

しかし、そうは思いながらも、鶴次郎は
、ほんのさつきまであいたくてどきどきし
ていたねえちゃんのところへ、どうしても
かえつていく気にはなれなかった。

なにかしら、さびしくてたまらない。ひ
とりでいつまでもしくしく泣いていたいよ

うな、せつなさだつた。



そのとき突然、鶴次郎は、うしろから、

「わあっ」

と、やわらかい手でおどろかされた。ふ

りむくとお寺に下宿している女の先生が、

花のように明るく笑いながら立っていて、

「なんだい、ちいさいくせに、いんきく

さい顔をしやがって、やめとけ」

と、男の人のようににらみ、それから、



of

「ボイルなげしよう」

と、いった。

鶴次郎は、すくわれたように、いきなり

「うん」

と行って、元気に立ちあがった。

「ぼくに、先になげさせてよ」

「よし、なげてみな、うんうんと空たか

く
「

空には、だいだい色にそま
ったうろこ雲

が、いちめに浮んでいた。
その空にむ

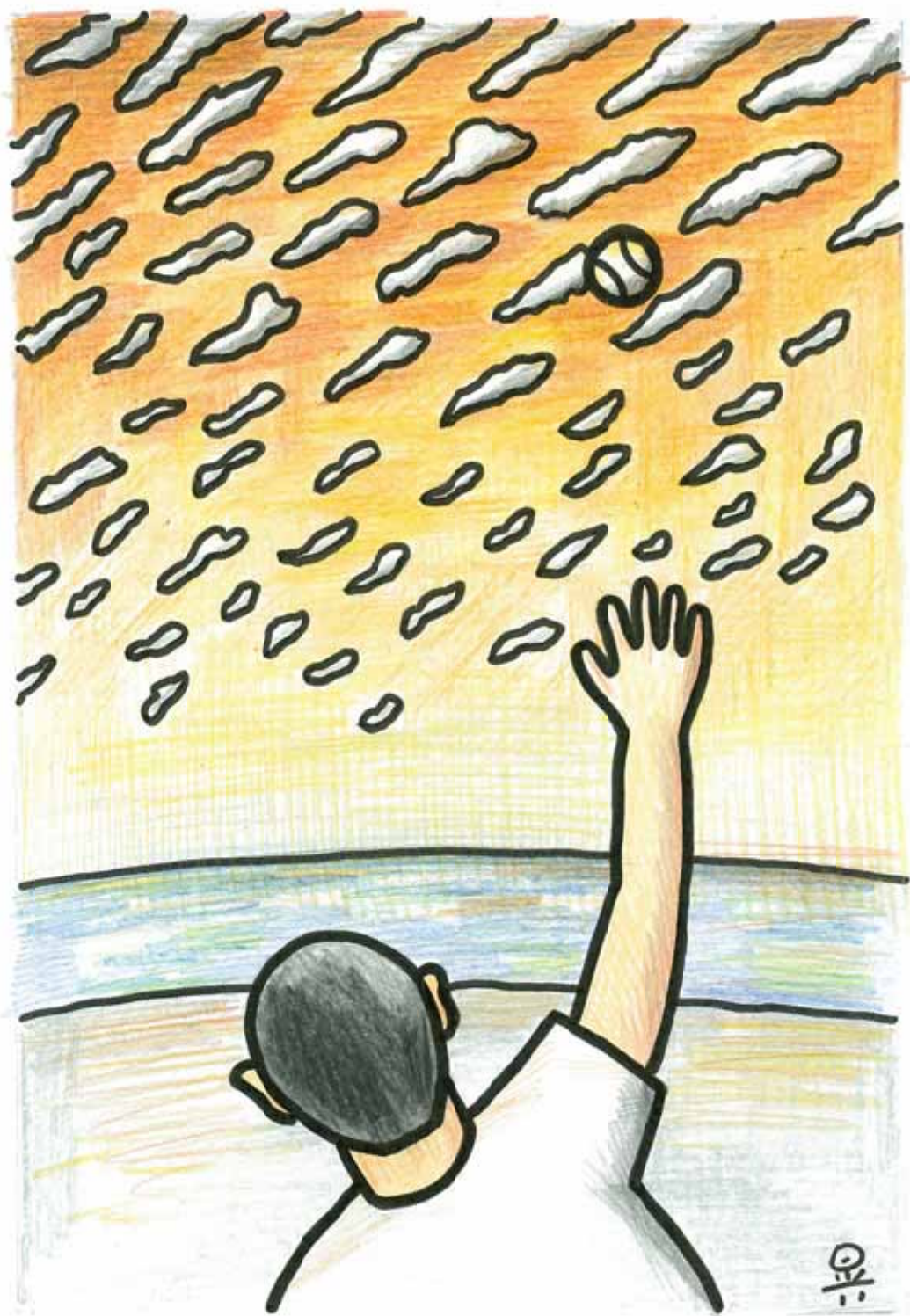
かって鶴次郎は、思いつき
りボールをなげ

た。
。

ボールは、ぐいぐいと
うろこ雲の中への

ぼっていき、やがて白
い線をひいて、すつ

とおちてくる。
。



おちてくるボールを、ふたたび自分の手
につかむために、鶴次郎は女の先生を追い
ぬいて、まるで心の中のさびしさをけちら
すように、まっしぐらに砂浜をかけた。

おわり

